

杜 榮（中国哲学史）

廣瀬淡窓の哲学思想に関する研究

本論文は、江戸時代後期の詩人・教育者・儒学者として著名な廣瀬淡窓（1782～1856）の哲学思想の構造とその特色を解明したものである。従来、淡窓に関しては、咸宜園を中心とした教育者としての業績、あるいは漢詩人としての側面が特に強調され、多くの研究がなされてきた。それに比べて、それらの活動の根底にある彼の哲学思想に関しては、個別の研究はそれなりになされてきたが、淡窓の個々の著述を掘り下げ、その哲学思想の全体にわたって考察を行った研究となると、必ずしも十分なされてはこなかった。

本論文は、淡窓の三大著書と称される『約言』、『析玄』、『義府』の分析を中心にして、その他の論著、随筆、語録、日記、注釈書などを援用しながら、淡窓の哲学思想の全体像を明らかにした研究として評価することができる。以下、本論文の構成に即して述べる。

本論文は、序論、六章からなる本論、及び結論によって構成されている。序論において先行研究を整理分析し、本研究の目的と方法を叙述した上で、第一章ではその生涯と著作を概観し、淡窓思想を考察するための基本資料について明らかにした。

第二章では、『約言』等の著述を取り上げ、淡窓の中心思想である敬天思想について、特に禍福応報論、善悪観、鬼神論などに焦点を当てながら、その構造と特質を明らかにした。

第三章では、『析玄』を取り上げ、「数」と「制数」の理論を分析した上で、老子思想の独特の解釈とその実践運用に淡窓思想の特質があることを明らかにした。

第四章では、『義府』を取り上げ、「義」と「理」の捉え方、及び人性論の特質を分析し、さらに淡窓の易解釈とその応用の在り方について明らかにした。

第五章では、以上の「敬天説」、「制数論」、「理義の説」の「三説」について、存在論、認識論、方法論の観点から総合的に分析し、淡窓思想の哲学的根拠を明らかにした。

第六章では、先ず「五経」と「四書」を中心とした経書に関する淡窓の解釈について、個別に取り上げてその特徴を明らかにした。次に淡窓と朱子学との異同について、存在論、認識論、人性論、経書解釈などにわたって分析した。さらに、徂徠学、古義学、亀井学に対する捉え方を分析し、淡窓がそれらの思想の影響を受けながら、自己の敬天説に立脚して、それらを取捨しつつ独自の思想的立場を形成していったことを明らかにした。

結論では、大観、折衷、簡易を尊ぶ淡窓の学風について検討を行い、淡窓が先行する諸思想を折衷・調和しつつ、敬天を中心とした独自の思想を構築したことを明らかにした。

本論文は、廣瀬淡窓の著書を中心に取り上げ、その哲学思想について解明したものであり、江戸時代の漢学者、思想家の中における淡窓の思想史的意義を今後さらに考察していくために、いくつかの示唆を与えたものとして評価することができる。ことに儒教経典、老子思想、朱子学、江戸儒学といった、中国思想とその展開に対して、淡窓がどのようにこれを捉え、受容しながら自己の思想を構築していったかということを総合的に解明した点は、従来には見られない本論文の研究成果として注目に値するものと言える。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分であると認める。